



笠井加付

東京

衣袋

田山敏明



笠はかけ 東京 田山花袋

(上) 野尻湖

あはれことしは己が身にとりて、いかにかりよき年ありけむ。塵高く
挙り、あつさやくかことき都々中にさまよふ昔七のかねて、一笠の
影とほく山々明媚に間に飛び、足跡はとく武藏甲斐、騎河、
伊豆、相模、上野、信濃に七国にまたがり、到る処吟興盛に起り、
詩囊はよく重く、亦淫世に何物たよとおぼへさきに到りき。此
間山名極々多く、奸風老地もまた少少きにあらわれと就中己
か心とひきりも五あり。一と富士川の激湍と云、一と箱根山
の半遠と云、一と妙義山の峻嶮と云、一と碓氷峠の大煙道と云



東京 田山花袋

先、さゆ、我は野尻湖、戸隠山二日遊と、今年第一快事といふ
かとおせり。

旅は好伴侶と得たも旅よりたのしきはよく、山は秋風北たちた
り山よりよきはよし。野尻湖のかま幽ありと、戸隠山のかま陰
ありとも、豈七回随一好風光地といふことを得へき。然るにこれ
は殊更、北二日遊と奉げて、旅中尤したのしき遊ありといふ。
これ何故ぞ、我は好伴侶と得て、乱荻疎々たる野尻湖北は
よりにやと、秋風北たちたるときを以て、雲影奇怪よる戸隠山
に登るを得たりき。



八月廿九日、これは上毛北遊と終りて、北信三木村根津栄輔氏



北宅にあり。村万山中にありて、晴嵐は夕雨を和し、蟬聲は虫聲
にまじり、秋叶滿野、之を己か吟懐を動かすもの、あらざるはふ
し。あしてや氏及の同村武井末藏氏は共に己か同輩北友、七葉の
別離、一旦相逢ふ北喜びあるに於てとや。詩話文談、酒酣にし
て耳熱し、夜深うして吟聲動き、甚た己か旅宴北つれなくとよく
さむるに堪えたり。
聞く戸隠山、これより近く、野尻湖また遠からず、己れは注意の
効々たるに堪え、遂に二氏と誘ふて、北山々のほり、北湖に遊
はむると約しき。
越えて九月二日、天氣いとよし、雲は全く晴れて、餘影總か高

社山北上にかゝれるのこ。午後二時、蓑装全くのひ、武井氏又
来り、遂に家を出づ。一阪正昇り一阪正降り、今田原といふとこ
ろに到る。是姫、飯縄の二山屹然として高く雲霄に聳之、清
容これと迎ふるに髪鬢たり。

諸共に君と川たより折きと空さへけふははれきたるあり
一里平川とをぐ。これより山路やくけけく、正七やく丸先あがりよれ
りたり。松高く茂りて、よりよりけエ社七過ぎ、馬頭觀世音比石表
立てるあたりに到れば、坂いよく高し。氣息先喘々、汗珠玉うご
とく、歩り甚たゆやむ。十五町許巔に達す。こゝには松二三株あ
りて、まじがらこれ等たために涼しき蔭を伴もくごとし。則ち杖

とたつ、憩ふ、一望をれば蒼夢の衣白きと書るごとし。昔は、
そは北衣ありろよ、えてあき凡北かろくやあきまへたると
二十坪は猶少し登りたると、こゝにあり。二氏いふ、こは上杉謙信の
越後より出るとき、先旌旗をこゝにたつ、敵軍と相應じたが古蹟に
して、古塚の數二十あり、これ名に起る所以より、今猶祭振るれば、
古刀槍と発見を多くと少ゆからそと。嗚呼武田上杉二氏北軍や、
正々堂堂、地は四郡に亘り、兵は五万と竭し、七年の百戰端結び
て解けぞ、空しく二英雄として漢夫地利と矢射ひるに在る。惜
いべし。

蘆所嶽と何ぞつ、蟬聲涼しき雜木山と下れば、一村あり。右間

村といふ、二君互に星姫山に裾と指さしあひて、明日はかゝる上越
ゆきゆきかたも。根津氏

かのうづ山とて、これこそちとをあるはこ甲さ知りけれ
諏訪七原よりふ処と過く、一古池あり。これ昔に野尻湖七跡ありと
いひ傳ふより此れ、信をべからむ。天野尻湖七近くありし、このこれ
にりして思知らるもの。尾花女跡花のうり風に吹ひく高原と、登
るもゆく登りゆられ、これよりはをう下り坂ふり。瘤、如き山にそ
ふて猶下れば。快絶！野尻湖七は眼下にあり。
しりしり池のけし、にううう切やけをありはきく、こけつぐら

湖光一碧、倒に班尾山に清容と寫し、漣波錯々、静に岸頭、乱

萩とうごのそ、野尻七驛は向岸にありて、藪野の茅屋夕陽と帯び、琵琶
が小島は池、一隅にりして、杉影天心と刺す。水は清くして樹ふ
に堪え、一鳥飛ばせして境もそく幽ろ、あはれ景色よきところ
よかふ。あはれかゞ山の中にかくまをうつくしきところありとは切やひ
かけざりき。己が心だのしは、いよくまきりぬ。己が吟興はまそく
動きぬ。されど、これ景色よは、いかにたへむ。これ景色よは、いかに
たはむ。休む己が筆にたつきと嘆ぶもの。湖に傍をりく、やがて野尻七驛につきて、常盤屋といふ旅店
にやとる。日本未だ高けれど、今日、くたやいとして、これ湖七月と
貝ひとたつ、思定をたけければ、

名物氷善夢を嘆き。妙味津々、殆人と著と指きがたきばかり
あり。健啖数梳、互にふる多きに誇る。武井氏

池近くやとと一々たゞくれは旅せつかれしをこればてけり
既、班尾山に風吹やしく、湖面瀟灑、くわがら平布と鋪きたる
どし。倒にうつれ山影、歴々として指点をべし。

おひらき雲に姿とるまくにうつせぬあやむかひのな
武井氏

班尾のこけの夕風やそぬらんふらふら池の波をきつまる
おひらき根津氏

琵琶島の松ふく風の別とたへて波をわがらよりの池

鏡の如き湖面と一艘成章かり小舟を欸乃うたひつゝ、こきゆく、
ふらふらに赤き雲うつりて最早夕ぐれをけとちかし。

つねにゆき夕ぐれまはらとあやふらしたうたひつゝかへりくる舟
波せりしきこえをきこふこけ池の夕ぐれくおまほゆるか
武井氏

さびしきは何にたとへんしのしりた池のこきあひの夕風
今宵は旧曆七月二十日よれば、月は十時退れどはと旅亭主人
はいり。十時頃までまたれぬをあるべきと、我は二氏と共に歌ひ
よこがけつゝまつ。武井氏
しのしりた池のさび波をきこふこけ池の夕風立ぬめり

根津氏

その染のくらき夜をかり女詠花人けきのへに左れとまづらん
とけしとあれ、戸外滴々此聲あり。こは夕立北雨ありき。今までは雲
しか、らざりしものと、よく見れば、黒き雲名残ゆく大空にこち
くたり。ちやにくい事かふ。今宵こそ月と見むと切のひもよと
と、いふくも興つきとそよまくに眠りぬ。

一夜や半時の頃よりいひ。不審夢さめて枕と奉れば、兩戸も閉りざ
る前窓に白きは曉にや。否月れのほれにはあらざやと思ひつくま、
急ぎ窓を推せば、一團の明月高く班尾山北上にかかりて、宵に雲
かけたふふし。二氏と呼起してこは景はいかにといへば、二人も共し手

と拍ちて、快哉と呼ぶ声四壁を動がせ。

まぢくそいつかいはね、うたむめさおれは高き山の端に月

(下) 戸隠山

三日、黎明、前にも欄干に凭りて、湖多を見こたせば、砥、如きま
北面に曉の雲、うまくりりて、鴉の三つ四つ二つばかり、こちどけ
に鳴きたまふ。地切りりるき限りあり。根津氏、

老つかれる池、せめてまかけいきて鴉とふくのしりて池

旅亭に主人いふ、こちより戸隠山にのほる五里七百は、跡はまよひ
やま、鶴ふびき村もふし。初めを登らむ人は、案内者と雇はせは
おぼつかひきこむれと、近頃は登山者の為め、樹に白紙を結び

付けたるより見れば、そのつぎつぎと行く玉と、鶴らよ教へられ、野
尻湖の景色に別々し切しけれど、今日は戸隠より長野へ一呼吸
に下らぬ覚悟あれば、そこくに用意とくくへて、旅亭と立つ。
今日も天気いとよし。越後七妙高山朝日を帯びて高く眼前
に聳ゆ。

名も知らぬ一村と過ぎしより、まことに旅亭の主人の如し。山路
やうやく高く。林、叢、溪流のどいよく多くありぬ。朝風は
涼しくてが客衣を襲ふて、山道のほろほろ汗をだに催さる。
此氣候のいたく異れぬ故らん。

くさかたき、峠のゆるゆるとあそび風よむかひて川はそよそよかりけり

秋草いたゞ処に多し。尾花は已に穂の乱れたるもあり。虫聲蟬
聲の左右につくまると、くさくさよさまるとに言はひかたけ
し。根津氏

秋草とくさくさくまるとくさくまるとのまけり、中道にかたき山道のゆるゆる

路に二助に分れたるところ多くあり。されど大方樹梢に白紙と
結びて戸隠山にのほろへき考ゆるといふ。それをたうらにあへき
くさくさのゆるゆると、黒姫山のゆるゆるとありてぬ。

くさくさくさくまるとくさくまるとのまけり、中道にかたき山道のゆるゆる
芝竹、小松のとの叢生したる高原と猶行く、願はれは過ぎ来りし
村々皆脚下にあり。野尻の湖も最早のゆるゆる見甲へしゆるゆるかた

りあふ。

湖もやめて見甲らんくみひれ少れりよよもはかりぬ
十町ほど登れば昨夜やまも湖も明かに見ゆ。深淵青潭、山
中一奇觀あり。根津氏

一のり此池のけしきめ之をとり見かへりかちよきよけりかな
ゆくゆく湖もとふりかへりつゝのほむ、

ふれ山とのほむまよしくしのしりれ池はまほしくこえてたると
根津氏

今一度くとかへりこそあかぬぬかやーしりれいけ
秋草乱れさく間と一助ちよらくとわかれ申くは名も無き谷

川一支流より。武井氏

切りたちてあまひてりむあき草れ花のや川谷川のさ

猶二十町ものほろしところにて、拍原よりと路と合を。これより昨

年根津氏の過きたる路なれば、迷ふこゝりしとよ。左に流る、

川と島居川とゆえ。昨年は路よまよひて、川の川をぬれそたり

しむとゆゑ、根津氏かたる。根津氏

去年のこゝぬれそたりしとも、川今日はふれよとくつりかな

これ川は戸かくし山より流れ出でたよありときくも、何となくつかし

き心地せらる。山いよく深くゆつて、凡いよく冷かに、道まを

くせまうて、歩ひこまをくくらし。松かけは、湯出も清くはま

こゝより越りて人々余ありけり。根津氏

此の山を先づ身取とて、木をけり松のかけり谷川北の
帯の如く蛇の如く曲りくれば、路をゆきくつて、黒姫北山と一廻り
を歩頃には、とりとりや戸かくし山七名残りはれにたりて、
しろき山北姿、屹として己が前に聳えたり、

つゆの日と暮くれかちり戸かくし山さへけふは晴已たる
島居川にかけたる橋と渡りて、一里半ほどりければ、戸隠の奥社
に登るへき大道あり。百年以上を経たる古杉鬱蒼として路
の両側を挟み、何となく神威厚ときやうびるくちせられ
ぬ。

柳のつらうつふのれけりとかくしのかくの御前北かうくしきよ
根津氏

日たけけしとてぬはかりと老けりけりとかくし山北木々北村を
巖路、南條たる間とのほろ事十四五町、奥社は山北半腹にあり
山気爽絶、久しくともまるべからむ。根津氏

大君北所付やをかれといのちかふとかくし山北神北御前に、
神北御前より清多正のをよ。おひく

此をいよけてきよきくくろふも午子けり神北御前北えたらし、
中社、寶光院皆深山、南條たる北下にあり。戸隠北奇くくいに
たりて盡く、

午飯を喫して山を下る。足先疲れ、気だまを疲る。二氏も亦一首七歌と詠せむ。一路長野に下れば、夕陽山にあり。夜清水屋に宿す。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

翌四日午後、これは歸りて今田原にあり。一望すれば黒垣飯縄の諸山依然として雲霄にあり。戸隠山はふかき雲の中にかくれて見えぬ。

かの山はふかきとめくりくつこつとせしむははつがきかぬ

(とほり)

Bellevue Hotel



